

「平成の政治改革」と公明党・創価学会(1)

平野 貞夫
元参議院議員

総論(「デモクラシー」の限界を考える)

1993(平成5年)8月、細川非自民連立政権が成立し、小選挙区比例代表制の導入、政党助成金制度の採用のために政治資金の規制などを行ってきたことが、平成の政治改革の概要である。これは制度の改革であった。

この改革によって、自民党単独で約40年、保守支配という形態では45年にわたった独裁政治に終止符を打つこととなった無血革命に、世界は驚き、日本にもようやく「議会デモクラシー」が定着したと論評する専門家もいた。

この時に私は、前号で述べたように後藤田正晴自民党政治改革本部長から、「小沢君や君らが、創価学会

を母体とする公明党を政権に入れたことは、日本の政治の禁じ手だ」と叱られた。私はこれに対して後藤田氏が警察官僚上がりであることから、「デモクラシーの本質を冒瀆する警察官僚の限界」と反論した。

数年後、公明党は非自民党勢力から離れて、自民党の「下駄の雪」となり、2000(平成12)年4月に、自民党・清和会(旧岸派)の森政権と連立した。

その頃に、私は後藤田氏の「創価学会・公明党、禁じ手論」をようやく理解した。

それ以来、私の最大の悩みは「デモクラシー」、日本語で言う「民主主義」の本質は、何かという問題であった。果たして「デモクラシー」が人類普遍の真理かどうか。方便としての「デモクラシー」を使う公明党・創価学会の実体に疑問を持つようになった。

デモクラシーの本質

さる5月14日、渥美半島の田原市で開かれた中浜万次郎の研究者として世界に知られた、元慶応大学教授の川澄哲夫先生を偲ぶ会^①に出席した。そこで川澄先生の持論だった「万次郎の夢は日本の草の根デモクラシー革命だった」を講演する予定のため、「デモクラシー」という言葉の切り口について悩んでいた。

「草の根デモクラシー」とは、民衆のためのデモクラシーと理解される耳ざわりのよい言葉である。創価学会が公明党を設立した頃に、よく使っていたことを記憶している。米国の市民・住民運動から、ジェファソンなどが提唱した用語で、ジョン万次郎の思想のポイントだ。創価学会幹部から米国の詩人で社会運動家のホイットマンが愛用していて、池田大作名誉会長の理念の一つと聞いていた。

21世紀に近づくともデモクラシー国家と言われる国々で、さまざまな人道主義に反する問題の発生が増大。私は人類の普遍的真理と教えられてきたことに疑問を持つようになった。2012年11月、哲学者・柄谷行人氏の「哲学の起源」(岩波書店)を読む機会があった。

そこには現在、普遍的真理のように理解されている

「アテネ・デモクラシー」の本質は「権力の集中を通過することによって実現される支配」(クラシー)の一形態なのだ」と論破していた。ギリシャの対岸のイオニア地方で生まれた「イオニア自然哲学と倫理」といふ考え方の国家があったとのこと。

その原理は、①出生、血縁、富などの自然的特権を認めない。②個人を大切にす。③市民の自由を保護すること。④が、国家の任務であり、目的である。ここでは市民が支配者と被支配者に分化せず、無支配関係で集団生活を送る政治組織の形態が存在していたことを、紹介していた。

この思想を医学の道に導入して、医道の倫理を確立したのが「ヒポクラテス」と論じて、医療を行うに貧富・身分を問わず、不正を犯さず平等に治療することを医療者の倫理とした「誓い」を確立したことを高く評価していた。このヒポクラテスの思想を、柄谷氏は、政治のあるべき道と示唆していた。

柄谷氏の著書を思い出しながら、田原市に到着し案内された場所が「渡辺華山博物館」であった。立派に整備された閲覧室に華山関係の画が並べてあり、その中になんと「ヒポクラテス」を画いた洋画風の日本画

を陳列していた。1840年頃、華山の画いたヒポクラテス像で、画像の顔は、華山がヒポクラテスの信念を絞り出したような表情であった。

華山が田原藩の家老として民衆のために尽力した功績が、博物館に残されており、特に災害や貧しい人々のために、華山がつくった「報民倉」は、ヒポクラテスの思想そのものだ。「報民」とは「民に報いる」とのこと。華山の志こそ「イソノミア」の考え方である。

ヒポクラテスや華山の志はアテネのデモクラシーとは違う。アテネ時代から現在に続く「デモクラシー」は、結果において誰かの犠牲で誰かが欲望を満たしている支配の制度だ。川澄先生が言う「万次郎の草の根のデモクラシー革命」とは、「草の根ヒポクラシー革命」と言える。華山の画はそう語っていた。

公明党・創価学会の「草の根デモクラシー」運動を検証してみると、1990（平成2）年に、小沢一郎自民党幹事長を会長に「ジョン万次郎の会」を設立した時、市川雄一公明党書記長は「草の根デモクラシーこそ、公明党の党是」と公言して、積極的に協力してくれた。創価学会の中にも理解してくれる人々が大勢いた。公明党が変わってきたのは、選挙制度の改革を

きっかけに、自民党に取り込まれる2000年の「第一次森政権」の頃からである。

小泉自公政権となり、社会保障費の削減や郵政改革、自衛隊のイラク派遣などが強行される時代になると、公明党は「民衆のための政治から、民衆を犠牲にする政治」に変質していた。ある時期「民衆のための政治改革」に熱心で、「公明党を解党し、創価学会は政治から離れる」と決定していたが、それを変節した原因とプロセスの検証が、本号からの狙いである。

竹下首相の退陣で始まった平成の政治改革

1989（平成元）年6月2日、竹下内閣はリクルート疑惑問題で総辞職する。竹下登首相は総辞職にあたって、5月下旬に自民党の政治改革委員会（会長・後藤田正晴）がまとめた「政治改革大綱」の実現を、自民党の衆参両院議員に要請した。この日の国会で後継首相に、自民党の宇野宗佑外相が指名された。

同日衆院本会議で、リクルート疑惑の国会運営の責任を問われ、原健三郎議長と多賀谷真稔副議長が辞任し、後任に田村元議長、安井吉典副議長が就任した。同月12日に宇野首相の女性問題が国会で追及され、7月の参院選挙への影響が懸念された。

7月1日、衆院事務局の人事異動があり、私の委員長昇格が先送りされたことが、政党間で話題となった。面白かったのは自民党の羽田孜国会改革特別委員長。議院運営委員会筆頭理事が、「平野君は公明党に深入りしすぎていて、自民党から批判が出ているのだ」と、新聞記者に話したとのこと。公明党と私の関係は政界から冷たく見られていた。

7月23日、第15回参議院通常選挙が行われた。自民党は比例区で15名、地方区で21名しか当選させることができず、非改選議員を加えて109名という惨敗で、過半数を割った。翌24日、宇野首相と橋本龍太郎自民党幹事長は、参院選敗北の責任をとって退陣を表明した。土井たか子社会党委員長は「山が動いた」と豪語。

自民党が次期総裁（首相）、幹事長の人選を巡って混乱している7月27日、創価学会の秋谷栄之助会長秘書役から電話。「秋谷会長から「平野さんに会って話を聞くように」と指示があった」とのこと。同日午後6時から会う。

○会長秘書 自民党の敗北をどう考えているか。
○平野 一人区の大敗に注目している。保守層が、消費税・リクルートで政治に目覚めた。

○会長秘書 7月21日に小沢先生と会ったとき、12月解散・1月総選挙との話が出たのですが、秋谷会長が気にして、学会の都合もあつてなるべく正確な見通しをと……。

○平野 どんな都合ですか。

○会長秘書 9月～10月財務と後始末で、11月解散、12月初旬総選挙がいい日程なんです。

○平野 小沢先生に話しましたか。

○会長秘書 話していません。

○平野 7月中頃、小沢先生と次の総選挙は自民過半数割れで政権交代。野党も国民も早期を要求する。自民は体制づくりの時間がかかる。11月解散、12月総選挙は無理でしょう。

○会長秘書 総選挙で自民党が過半数を割ることが、もつとも困ります。公明は埋没です。近々、市川・権藤・私で小沢先生に会います。

○平野 その時、政治日程も率直に相談しなさい。ポイントには自民党が政権を続けるとき、是々非々で対応できるかにあります。

○会長秘書 総予算に賛成するぐらい柔軟な対応を検討するよう、会長に報告します。

（続く）